畑と森の風景の中で。

三笠市

Mikasa

北海道ワインの産地となっている空知。
中でも、地域の牽引役となっているのが、
三笠市にある山崎ワイナリーだ。
ここ、達布（たっぷ）地区には
近年若い世代の移住者が多く、
その多くがワインづくりを
目指してやってくる。

美しい丘の風景が広がる三笠市。
古くはアンモナイトから石炭まで、
「土」と密接に関わり合いながら
生きてきた三笠市の風土が見えてきた。

丘の上に夢あふれて

今から16年前。当時、農家としての日本初のワイナリーといわれた山崎ワイナリー。家族の指紋を組み合わせて花に見たてたラベルが貼られたワインは、今や道内外問わず愛される1本になっている。

この土地の素晴らしさを充分に発揮したワイナリーをつくったのは、山崎和幸さん。なだらかな丘に植えられたブドウ畑の間を登っていくと、醸造施設、ショップ、バーベキュー施設のある丘の上の広い庭に出る。丘の上からはブドウ畑が見下ろせ、遠くに三笠の街並みが広がる。わざわざここにワインを買いに来るだけでも価値がある、そんな風景が広がっていた。

今、この地区には10組以上、地域外からの移住者が集まっている。そのほとんどが、ワイン用ブドウの栽培や野菜栽培を目的にしている。

地元民、移住者、それに市役所の職員がうまく溶け合って、地域全体で盛り上がっていこうという雰囲気。訪れ

写真上／宴会にはもちろん山崎ワイナリーのワインも登場。
写真下／「食べてみな」と渡されたのは、メロンの漬物。地域の郷土料理のひとつ。

影山 航大さん

26歳

岩見沢市出身。2017年3月から、滝沢ワイナリーの研修生としてブドウ栽培を習う。「いずれは独立するのが夢です」。

信田 道男さん

59歳

ブドウ栽培農家。ハンターでもある。地域の会計役を担う愛されキャラ。

赤坂 卓也さん

28歳

岩見沢教育大卒。ホテル勤務を経て地域おこし協力隊に。「ここで農家民宿を開きたい！」。

渡邊 登さん

69歳

「長老」と呼ばれていた、地域の世話人。「何かわからないことがあったらなんでも聞いて」。

濱田 洋文さん

60歳

岡山県出身。東大医学部を卒業し、がん治療や遺伝子治療の分野で活躍。56歳で退職し、新しいことをやろうと、山崎ワイナリーでの研修を経て就農。昨年からワイン用ブドウの栽培を始めた。「晴耕雨読の生活を楽しんでいます。都会に住んでいたらわからなかったことは自然とのつき合い方。雪の重みで屋根が潰れたり。苦労はありますが、夫婦で一緒の時間を過ごせるのはいいですね」。

野見山 朋秀さん

39歳

福岡県出身。ミニトマトとメロンを栽培する農家として離農跡地に就農。3分の1はJAに出荷し、残りは個人飲食店に直接卸している。「三笠のネームバリューをもっと高めていきたい」。子どもが生まれたばかりとのことで、「子育て支援や教育制度にも関心があります」と。

現在達布地区に住む住人たち。
それぞれ刈払機を持ち地域の環境を整える。

たのは、まだ夏が始まったばかりの時季。達布地区では、草刈りとその後の懇親会が行われていた。

三笠市街地の西側、岩見沢市と美唄市のちょうど中間に位置する達布（たっぷ）地区。この日は、年に数度ある草刈りの日。地区の会館を中心に、道路沿いの雑草を地域住民で集まって刈り取っていく。2時間程度の労働の後は、楽しみにしていたバーベキュータイム。もちろん、会場は山崎ワイナリーの庭にあるバーベキュー小屋。そこでは、恒例の自己紹介も行われた。

顔ぶれを見ると、山崎ワイナリーや同地区の滝沢ワイナリーの研修生などには、20代、30代と若手が目立つ。そこに、地元の50代、60代も混じる。年齢の垣根はあまりなく、それぞれに夢を持ってここに集っているといった風。そして、そのすべてを大らかに受け入れている山崎さん一家がいる。研修生たちがこの先数年の後に、本格的にこの地で暮らしを営んでいったなら、きっと達布地区は誰もが憧れるような地域になるのではないかと、明るい未来を想像することができた。そこかしこにある美しいブドウ畑の風景と、そこで採れたブドウを使って造った、それぞれのワイン。ヨーロッパではあたりまえになっている、地域内でのワインツーリズムもより盛んになるだろう。

「農業には、家族で働く喜びがある」。一人の移住者の言葉が心に残った。女性の社会進出や核家族化が叫ばれて久しいが、豊かな自然の中で夫婦や親子、兄弟がともに汗を流して労働することで得られる充足感。そんな毎日がとても幸福なのだと教えられた。

かつて炭鉱の街として栄えた三笠市。昭和30年代半ばには、現在の人口のおよそ7倍もの人が暮らしていた。閉山と共に激変した街の歴史は、今、ワイン用のブドウ栽培という新たな1ページを刻もうとしている。

写真右から、山崎ワイナリー代表の山崎和幸さん、長男で醸造を担当している亮一さん。栽培と営業を担当する次男の太地さん。

森に入り、この日は「つる切り」の作業。大木に巻き付いている細いツルを、一つひとつナタで落としていく。
この作業をすることで木がまっすぐに大きく伸びていく。写真左上は、2人の指導係を任されている佐藤雅彦さん。
山の歩き方、木の状態の見分け方、道具の使い方まで、細かく指導する。

女性の雇用で広がる、林業の可能性

創業70年を迎える三笠市の堀川林業に、この春、まだ20代になったばかりの若い女性たちが入社した。浦河町出身の尾井真穂さん(20歳)と、埼玉県秩父出身の宮城愛さん(23歳)だ。周りを見渡せば、作業員たちはベテランの風格漂う男性揃い。そこに若い女性がいることには違和感もあるのだが、林業業界が、変化し始めた証なのだろう。

これまでは、山の中での伐採や植栽など、森林の管理が主な業務内容だったが、堀川林業では木材そのものの活用を考えたり、一般の人が木や森に触れ合う機会を作ることで、森や林業に対する知識を深めてもらう取り組みを行っている。例えば狭い敷地内や家屋、構造物の近くなど、木を横に倒す通常の伐採ができない場合、ツリーイングという、ロープを使って安全に木に登る技術を活用する。高木を上部から少しずつ伐り落とす特殊な伐採作業だ。「高校生の時にツリーイングのイベントの手伝いをしたことが、この仕事に興味を持ったきっかけ」と話すのは尾井さん。高校2年、3年と続けて手伝っていた頃は「半分遊びのような感じでした」と振り返るが、東京の専門学校に進学し、就職活動を始める頃には「北海道に戻りたい」と考えていた。その時に思い出したのが、楽しかった高校時代に体験したツリーイングだった。その思いを胸に堀川林業に就職。現在は準社員として、現場作業員の仕事を担っている。

一方の宮城愛さんは、「仕事ありきで大学を選んだ」と語るほど、早いうちから自分が将来就きたい仕事について考えていた。埼玉県から北海道大学へ進学。森林科学科で国の林業に対する政策や森林環境について学んだ。研究などの道へは進まず「とにかく現場に出て働きたい」と作業員の仕事を希望。その熱意は会社の制度そのものにも変化をもたらした。

森に入るときの必需品。ヘルメットを着用し、腰にはナタと水筒を下げて。ナタを研ぐなどの整備も自分たちで。

「1年目は作業員として山の現場で働き、2年目は自分の意志で作業員か職員かを選ぶことができる『準社員』という立場をつくりました」と、堀川林業の代表取締役髙篠和憲さん。基本的に林業の作業員は季節雇用。職員になれば月給制度で通年雇用となる。作業員の中には、ボーナスは出なくても、「夏場にまとめて働いて冬はゆっくり休みたい」という季節雇用を自ら選ぶ人もいる。職員になれば現場の仕事に加えて、全体の行程管理や報告書、見積書の作成などの業務がある。

「実作業は難しいのですが、山の中での仕事が好きです。今後は資格を取得して基礎的な知識や技術を同時に身に付けていきたい」と、宮城さん。同期の尾井さんも宮城さんと同様、現場作業員の仕事からスタートした。「力仕事が多いので、いつも付いていくのに必死です。体力が続くかが今の心配事」と、話してくれた。現在2人は現場作業員として、朝7時から16時まで山に入って働くと同時に、木の基礎を学ぶ研修にも通っている。

「長い目と広い視野で森を見ることができる人材が求められています。林業にも楽しみや達成感があることを知ってもらいたい。林業そのものにもっと宝があると思っています」。女性の進出で変わり始めた林業の世界。これまであまり知られていなかった業種だからこそ、その魅力はもっと広がっていくに違いない。

20代の若手から70代のベテランまで。
山の作業員たちと一緒に。

堀川林業社長の髙篠和憲さん。「女性を雇用することで、今までアバウトにしてきた勤務形態や安全管理について、細かく整理することができた」。これからの企業は、働きやすいシステムをつくり上げることが必要と話す。

三笠市で働くヒト 01

尾井 真穂(おい) さん
(写真右)

浦河町出身。岩見沢農業高校森林科を卒業後、東京の環境関連の専門学校へ。在学中「北海道に戻りたい」と就職活動。高校3年生の時に手伝いをした、堀川林業のツリーイング(特殊伐採)に惹かれ、就職を希望。

宮城 愛 さん
(写真左)

埼玉県出身。北大の森林科学科を卒業後、林業の現場に携って森林のことを学びたいと入社。造材や育森の作業員として現場で働くことを希望した。